

毛むくじゃらで曖昧な境界

—— 社会的メタファーの境界でエスノグラフィーすること ——

ポール・ハンセン
菊池真理 訳

毛むくじゃらで曖昧な境界 —— 社会的メタファーの境界でエスノグラフィーすること ——

ポール・ハンセン
菊池 真理 訳

要旨：

本稿は、これまでの北海道の産業酪農場、大阪の犬と人間の関係、また2014年の冬にジャマイカで行う予定である比較研究を通じて、動物-人間-テクノロジーの連関に焦点を当てる。これらのトピックにおける、非-人間と人間との間の、規範的とされる、身体的で情動的な境界の日常的な逸脱の観察を通じて、ネットワークとエージェント、潜在的可能性 (potentiality) の概念が非常に重要であると同時に、大きな問題であることが明らかになった。このことは、彼らの生活を「観察」することだけでなく、長期間彼らの生活に「参与」することに依拠して研究する人類学的民族誌においてとりわけ言えることである。要するに、人類学的エスノグラファーの観察は、実験室や医療活動のように、そして他の社会科学のやり方とは対照的に、「すること」と共にあるべきである。

それゆえに、人類学者は、相反する *umwelten* (環境世界) に存在すると言える。一方では彼らは自己と他者の身体的、現象論的な経験に焦点を当てる、その知見を身体化したフィールド調査者である。そしてもう一方では、他の社会学者や将来の研究者たちに、学問の共通言語 (しばしば曖昧なものであるとしても) で、フィールドでの知見を伝えることが期待される教育者や書き手である。このどっちつかずの立場においては、ブルーノ・ラトゥール (Bruno Latour) が、社会科学の言説に見られる「デフォルトの〈社会的なるもの〉」(default social) と呼んだものへのコミットには限界があるのではないかと考える (Latour 2005)。本稿では、人類学者ティム・インゴールド (Tim Ingold)、理論家ドナ・ハラウェイ (Donna Haraway) 及びジャック・デリダ (Jacques Derrida) の批判的研究と共に、人間と非-人間の環境世界の交差に注目した私自身のフィールドワークの経験から、非歴史的で一般化するような概念化ではなく、歴史的かつ個別的な概念化の有用性を主張する。私の事例では、ラトゥールの用語であるネットワークをインゴールド的な「メッシュワーク」(meshwork) として、同じくエージェントもしくはアクタントを、抽象的なカテゴリーによって言及するのではなく、特定の、歴史的に位置づけられ、そして展開される諸可能性と諸潜在性を説明するものとする。

はじめに

私は、自分自身を人文学に深く根をおろしながらポスト人間学 (posthumanities) へ移行しつつある人類学者であると考えている (cf. Kohn 2013, Wolfe 2010)。私は主に、動物-人間-テクノロジーの関係に焦点を当ててフィールドワークを行ってきた。2006年から、北海道十勝地方にある産業化しつつある酪農農場の調査を行い (Hansen 2010, 2012, 2013a)、2009年からは、日本の都市で人間-犬の諸関係について調査を行ってきた (Hansen 2013b)。そして2014年からは、ジャマイカでこれらのテーマについての比較調査を行う予定である。動物-人間-テクノロジーの諸関係に焦点を当てると、結局は、ANT (アクターネットワーク理論)、ひいてはSTS (科学技術社会論) の現代的な諸議論へと取り込まれることになる (Cf. Franklin 2007, Sisimondo 2010)。本稿で私が提示することは非常に端的に要約することができるが、私はそれを辛抱強く、綿密に論じることにはしたい。

人間、非-人間である動物、テクノロジー、及び (それほど登場することはないが) 霊的存在の相互関係に関する人類学的研究を行う際、ある問題に繰り返し直面する。フィールドワーカーにとって、このような多様な存在たちをつなぐ、あるいは分断するものは、明確であることもあれば、曖昧であることもある。たとえば、(雌)牛は人間ではない。これは議論しやすい。しかし、牛の霊とは一体何なのだろう。私が北海道でフィールドワークを行った際、牛たちの靈魂が、ある農場主をして彼らの霊を慰めるための高価な畜魂碑 (家畜のための慰霊碑) を建立させている、という話を聞いた。その農場主はまた、毎年動物の供養儀礼を執り行い、自分でも参列している。この事例において、ネットワークとエージェンシーに関する問いと答えは単純ではない。誰が、あるいは何が、これらの行為を動機づけているのか？ それはその農場経営者か、生きている牛たちか、牛の霊たちか、畜魂碑を建立した会社か、またはある信仰体系なのか？ おそらく、いい加減に答えようとするれば、新マルクス主義者のお決まりの言い逃れ文句のから一つ選ばばいいだろう。すなわち、経済か、社会か、あるいはハビトゥスである。おそらく、これらのすべてかもしれない。もしそうだとすれば、次なる厄介な問いへの答えもまた同様なのだろうか？

観察と理論化との間のつながりを問うことは、人類学において新しいことではない。アルフレッド・クロバー (Alfred Kroeber) はフランツ・ボアズ (Franz Boas) の最初の大学院生であり、コロンビア大学以外の人類学科の基礎をカリフォルニア大学バークレー校でつくった人物であるが、彼はその時代における文化人類学の方法論と理論に関する議論において中心的な人物であった。人類学に関する彼のしばしば引用される記述、「諸科学の中で最も人文的であり、そして人文科学の中で最も科学的である」は、100年近く経った今日においても適切である。要するに、人類学における価値と動機に関する諸説明は、確実に、ないし異論の余地なく科学だと言えたことは決してなかった。それでもやはり、パンドラの箱を開けること、ないしラトゥールのブラッ

クボックスによって問題を括弧に入れてしまうことの隆盛にもかかわらず、価値または意味に関するしばしば理解の困難な諸側面は、人類学が取り組まねばならない実存的経験であり続けている。したがって、本稿の要点は、批判的というよりも、より警告的なものである。私は、ANTに影響を受けた近年の人類学における「ネットワーク」や「エージェント」という概念ツールは、きわめて重要ではないかと考える。しかしながら、これらのツールは、もし広すぎる文脈で用いられれば、フィールドでの民族誌的な「出会い」(ethnographic encounters)の間に壊れてしまいやすい。これは、とりわけ、異なる環境世界 (*umwelten* または *enviro-worlds*) が問題となるような出会いにおいて言えることである。さらに、もしポスト人間 (posthuman)、多種性 (multispecies)、ないしコスモポリタン人類学の理論的及び説明的な可能性に向き合うことを望むのであれば (Cf. Kirksey and Helmreich 2010, Kohn 2013, Rapport 2013)、個別の、身体化された諸関係に焦点を当て続ける必要がある。このことは単数形ではない、複数形の環境世界を強調することである。なぜなら、人類学的な理解や説明は、常に、状況依存的で個別的な諸環境の一部としての、歴史的に個別的で状況依存的な諸存在から生み出されると同時に、それらについて書かれるからである。

私の民族誌的経験において、出会いや説明は、絶え間なく変化し、身体化され、個別で、歴史のおよび環境的に状況づけられた生きものたちやモノたちによって生み出されているし、そしてそれらに関してのものである。そのような大文字の他者 (我々の対話者たち—それが生き物であれ、無生物であれ) に関する経験を小文字の他者 (すなわち観客) に対して翻訳することは、常に不十分かつ不完全なものである。我々の毎日の出会いの場において、エージェンシーは決して等しく配当はされてはおらず、諸ネットワークは完結したものとして経験されることはほとんどない。以下においては、身体的でエコロジカルな環境世界に関する理論化は、主に3つの出典—ヤーコブ・フォン・ユクスキュル (Jakob von Uexküll) (2010 [1934])、今西錦司 (2002 [1941])、ティム・インゴールド (Tim Ingold) (2011: 76-97, 229-243)—に依拠している。この概念化を支持するにあたって、私は、現代的で、ますます当たり前ものになりつつある2つの酪農実践—それは、諸身体と、動物-人間-テクノロジーの複雑な相互の諸連結、つまり回転式搾乳機器による牛乳生産と人工授精を含む—に関する民族誌的記述に焦点を当てる。

毛むくじゃらであいまいな境界：生命及び曖昧さについて

我々は、「部分的なつながり」(Strathern 2004)の世界、つまり非-人間のエージェンシーの説明をより複雑に、またしばしば追跡できないほどにするようなつながりの世界に住んでいる (cf. Beck 2009, Bennet 2010, Kirksey and Helmreich 2010, Kohn 2013)。このことははっきりしている、と私は主張したい。*Fuzzy Bounds* は、本稿の翻訳前 (英語版) のタイトルであった。しかしながら、このタイトルの多義的な意味は、日本語では失われてしまった。英語で *fuzzy* は、*furry* (毛皮で

覆われた、フワフワの) 一人間から熊(本物またはぬいぐるみの熊)に至るさまざまな「動物たち」の毛に見られるような一のいくらか子供染みた表現である。この意味でのfuzzyは、明らかに、人間-非-人間(たとえば牛や犬のような)の様々な関わり合いの触覚的な経験を含意する。しかしながら、fuzzyという言葉は、たとえば、霧の中や夕暮れ時における物理的な境界線の始点と終点のように、不明瞭さ(unclear)という意味もある。この定義は、はじめの定義の触覚性とは対照的な、視覚性における曖昧さや不確かさを示唆する。私が議論する犬たちや牛たちは、両方の意味において曖昧な他者である。彼らは異なる仕方ではあるが相当程度に、家畜化された哺乳動物というあり方にそうようにしつけられているが、我々人間と彼らとの間のつながりは、情動的にも歴史的にも、不明瞭にしか理解されていない。私は別稿で、デリダ(2008)とハラウェイ(2008)に従って、それらがそれぞれ「個別的」で「重要な」他者であるということ詳しく論じた(Hansen 2013a, 2013b)。語の制約の内側における、記述のための語彙としてのfuzzyのもつこの柔軟性こそ、私が目指していたものである。

クローバーによる前述の定義によって強調されたように、種々の境界線のもつ曖昧さはまた、人類学自体の一貫性のない、矛盾する性質にとくに根差した問題でもある。これは、ティム・インゴールドの「人類学は民族誌(学)ではない」と題された論文において展開された要点である(Ingold 2011: 229-243)。クローバー及びインゴールドを拡張しながら、我々は、人類学を、つねに方法論的および理論的リミナリティにある学問分野として概念化するために、人類学者ヴィクター・ターナー(Victor Turner)から借用することができる(Turner 1969)。一方では、人類学者は、経験志向の身体化されたフィールドワーカーである。彼らは、社会・文化的諸環境や諸条件に関するデータ収集者ないし記述者である。が他方では、人類学者は、学問の共通言語(しばしば曖昧なものであるとしても)で、フィールドでの知見を伝えることが期待される教育者や書き手である。彼らは一般に、他の人類学者、社会学者、ないし初学者に、知見や概念を伝える。このようにして、人類学者たちは、社会的及び文化的データに根差した理論家あるいは「応用哲学者」となる。それでも、実際には、いかなるそのような二項対立も、そのどこか中間へと必然的に傾れ込む。人類学者は、これらの二重の役割を一つの、しばしば居心地の悪い学問分野へと圧縮する。よく、二つのうちどちらか一つの側面—フィールドワーカーか、あるいは書き手か—を選び取ろうとする者がいる。それにもかかわらず、このリミナルな領域を進んでいくことは、実り多い人類学(者)が成し遂げる錬金術である。すなわち、生のデータ収集を行い、そして、データを得るといふ個別の経験を通じて、理論化し、一般化し、還元し、比較することが可能になるのである。

しかしながら、行為すること及び理論化することにおいて、人類学は、その学問分野の民族誌的な要素が抽象的な社会理論の言説のモードにいかにか深く関わり続けていられるか、ということについては、ある限界(又は行き詰まり)に達したと考える。このことは特に、諸パラダイムや

それが伴う専門用語が、外部はもちろん、人類学内部でも広く共有されていると見なされている場合にあってはまる。分かりやすく言えば、ネットワークとエージェンシーというメタファーは、個別的で身体化された人間と非・人間との諸関係や諸環境世界を説明するにあたって、どれほど役立つのだろうか？たとえば、ある牛か、又はある農場の用具の一つが「エージェント」である、またはエージェンシーを持っている、と主張することにはどんな意味があるのだろうか？社会的 (social) とネットワークという語の結び付きは、冗長ではないのだろうか (Hacking 2000)。

そのような問いに取り組むにあたって、私は、主に人類学者ティム・インゴールド (Tim Ingold) (2011) の仕事に焦点を当てると同時に、ポール・ラビノウ (Paul Rabinow) (2011) にも若干触れる。しかしながら、最初から明白なことは、私の目標は、建設的なものを伴う批判ではない。私は、「ネットワーク」または「エージェント」という用語が新しく、改良された普遍的な標識に取って代わられるべきであると主張しているのではない。これは、インゴールドが「メッシュワーク」を概念として用いる際に行っていることである (2011: 63)。私の主張は、はるかにスコープが控えめである。以下では、ギアーツが彼の悪名高い論文「反 = 反相対主義」(1984) の中で述べているように、何かを排除することではなく、バランスを取るという問題が焦点となる。私自身のフィールドワーク経験を用いながら、私は、メッシュワークと並んでネットワークを概念化することのもつ、説明的な大きな潜在性に賛意を表す。また、個々の素質 (capabilities)、能力 (capacities)、そして個別の生の諸軌跡および「潜在性」を有する、個別的で、それゆえ歴史的に状況付けられた、モノたちや生きものたちを説明するためにエージェントまたは「アクタント」を参照する必要性があると述べる。したがって、私の処方箋は、ソクラテス的なもの一汝自身を知れ一となる。研究者は、研究者／書き手としての彼らの立ち位置及び諸関係を問わなければならない。もしネットワーク及びエージェントのみが自分の目的に合致するのであれば、それはそれでよい。しかし、民族誌的記述の観点からは、オルタナティブな一ほとんど議論されはしないと一しても一選択肢があるのだ。

基本的に、この点に置いて私はインゴールドやシスモンド (Sismondo) (2010) のような人たちに賛成なのだが、「ネットワーク」及び「エージェント」という概念は曖昧 (漠然とし) すぎて、曖昧な (毛むくじゃらな) 他者たちと我々の変化しつつある諸関係を議論することができないと考える。マクロレベルでは、ネットワークまたはエージェンシーへの手放しのフォーカスは非常に複雑になり得るが、より重要なことには、ミクロレベルの分析の際にそれらは個別の生き生きとした諸関係をぼやけさせ、意図的に歴史を奪い脱政治化しさえするのである (Callon, Lascoumes and Barthe: 2011: 226-228)。したがって、それらは、私が民族誌的に出会ってきた毛むくじゃらの非・人間の他者たちを取り扱う時に、誤りを導くことになる。

ラトゥールは最近、ネットワークに関して2つの意味を新たに提示した (2013: 27-46)。彼の第一の語法である汎用概念としてのネットワークの使い方は、いかなる議論においてもきわめて重

要である。たとえば、コンピューター・ネットワークまたは製品流通ネットワークである。このようなネットワークの捉え方は、実際に存在し、追跡可能な物質的な諸連関を指し示す。しかしながら、私は、第二の使用領域で定義されるようなネットワークの捉え方には問題があると考え

「アクターネットワーク理論の中心に見出される自由な連関（原文、大文字）の原理—ないしは、より正確に言えば、非還元（原文、大文字）の原理—は... 観察者たち自身に、彼らの情報提供者たちが持っているのと同じように、研究における行動の自由を（与える）...」

(*ibid*: 32 大文字表記はラトゥールによる)

これは、経験的で身体化された（現場において／状況付けられた）人間・動物・テクノロジーの諸関係を伝えるためには曖昧すぎる。もちろん、後者の意味におけるネットワークは、潜在的可能性に溢れている。実際にはそれで満ち溢れている！これが問題なのである。そのような「制限なしに自由気ままで、どこでもつながる」ようなネットワークの集合体（見た感じ途切れなくつながった複数のネットワーク）においては、エージェント（エージェンシーと共に）もまた曖昧になる。そのような概念は、私が以下で略述する、きわめて個別的で、歴史的で、そして実に個的で、相互作用的な人間と非-人間の諸関係として私が考えるものを扱うには十分に的確ではない。

共通の基盤：乳牛たちの現在

北海道十勝地方は、季節によって、30度まで上がり、零下20度まで下がる。このような気候のため、十勝北部の景観は、それが自然的なものであれ人為的なものであれ、日本における環境的文脈において特異である。たとえば、野生の竹は生息せず、ハイブリッド米であってもコメの生育は良くない。人文地理学的観点からは、日本の大部分と比べて人口はまばらである。私のフィールドに最も近い駅は40キロも離れており、大部分の日本人にとって想像できない状況である。十勝は、広大で、年間のほとんどにおいて生産性が低いため、土地は比較的安価である。酪農産業ではここ数十年、大きな変化が現れている（Hansen 2010, 2013a）。単家族経営の酪農場は、急速に工業的な共同株主会社に道を譲っている。これは、本稿では列挙しきれないほどのグローバルな農業実践における無数の問題を浮かび上がらせる（cf. Kirby 2010, Pollon 2006）。しかしながら今論じている事例においては、このことが意味するのは、日本の消費者が世界市場の「わずか」3倍の価格で牛乳を手に入れられるようにするために、単家族経営の酪農場の急速な

減少と、それに伴う共同所有農場の増加が起きているということである。1995年以來、北海道の酪農業・酪農場の平均規模は、徐々に増加してきた。これは、たとえば、畜牛数、諸経費、ローン、借地、家族さらには共同体以外からの労働者の数を含む。これに付随して、酪農経営の数は、たとえば政府による生乳生産割当数から見るに、徐々に減少してきた。これはつまり、一言でいえば産業化である。



図1 回転式搾乳機器の全景図

私は、上の写真のような回転式搾乳機器を用いたある農場で一年間働いた。このような農場は、高度に産業化された、ひとつの生活世界である。私が働いた「大いなる希望農場」（仮名）は、24時間稼働の農場である。約40名の従業員がおり、彼/女らは昼間又は夜間のシフトで働いている。彼らの大半は地元民ではなく、たいてい20歳代である。3分の1弱が3年間の契約で働く中国人である（実際は、「研修生」として働くべく負債を抱えている）。数名は農家出身者であり、多くは自称フリーターである（Hansen 2010）。この農場では、労働者は平均すると約11か月で離職する。彼らは協力して2400頭を超えるホルスタイン種の乳牛を搾乳しまた世話するが、その頭数は徐々に増えつつある。この農場主は、自分の退職までには3000頭まで増やすことを目標にしている。

人間の従業員を管理することは簡単で分かりやすい。基本的に、それは、24時間サービス産業における仕事のようなものである。労働者たちはやって来て、そして去って行くが、機能的なネットワーク（農場主の頭の中には存在する）の観点からは、彼らは、1日に3回、牛から搾乳して、貯蔵タンクへ集め、トラックで乳製品製造会社に運ぶために、皆で一緒に働くことになっ

ている。それに対して、この環境における牛たちの管理は、特に興味深い。平均すれば、搾乳所における労働者の牛との接触は18秒である。この接触は常に、何らかの物質—たとえば搾乳ホース、あるいは手袋—によって媒介されている。

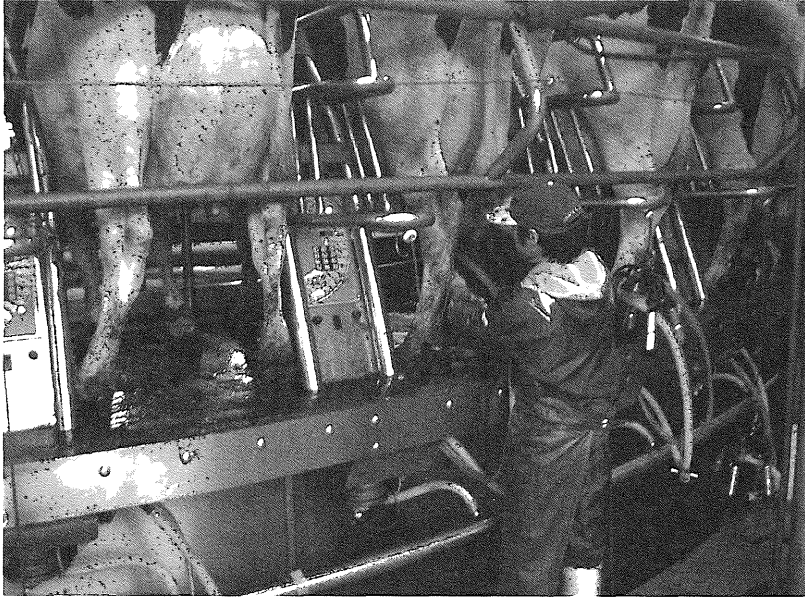


図2 人間の目から見た自動化された搾乳プロセス

牛たちは、番号でコード化され、個体識別番号が記された耳標が付けられ、センサーが装着され、中央コンピューター・プログラムによって大規模に組織化されている。まさにパノプティコン的な装置ともいえる、この回転式搾乳機器は、中央データシステムに直接ネットワークで結ばれている。その搾乳所は、日々の牛乳生産量、牛の体重、そして、生年月日、牛の原価、病歴、人工授精の有無、各人工授精に使用した精液の費用までも含む中央の公開データによって増補させられた同様のデータを記録する。この機械化されたテクノロジーはまた、自動の空気圧式ゲートで牛たちを分類する。要するに、コンピューター・機械のアッサンブラージュは、ある特定の牛たちを、治療の必要性があるであるとか、受胎を試す時機になったとかいう判断する。手短に言えば、それぞれの牛の生は綿密に細部まで記録され、そして可能な限り、人間の手によってはほとんど覆されることのないオートメーション化されたシステムの集合体によって管理されているのである。

ネットワーク環境：テイク1

この表層的な記述からでさえ、ラトゥールの言う一般的な意味における数多くのネットワークの存在が明らかだろう。そこには2本足と4本足の労働者たちのネットワークがある。ひとつは、概して農場主の頭の中で組織化されているネットワークであり、他方は主にコンピューター・システムによって管理されているネットワークである。これらの生きた人間と非-人間は、別の無生物の非-人間—すなわち回転式搾乳機器—を經由してネットワーク化されていると理解することができる。しかし、前述したように、ネットワークを作り出す潜在性は、創造性に富んだ精神にとって、使い果たされることはない。たとえば、過程を示し、ヒエラルキーを重視しないように、諸要素をハイフンで自由に結びつけることができる。言い換えればエージェンシーを分配させることができる。例えば、牛-機械-コンピューター-管理部-獣医のネットワーク、というように。これは、ある牛に関する情報がコンピューターに送信される時に観察されるものである。そのコンピューターは次にあるコードを中継するが、それによって農場はある牛を、日々農場を訪れる獣医たちの一人が受胎を試みるよう、他の牛たちから引き離す。これは筋の通った、粗雑な説明であるが、これについて私は以下に民族誌的に詳しく述べることにする。しかしながら、牛から人間の子どもまでのネットワークは追跡され得るだろうか？

牛-労働者-機械-貯蔵タンク-トラック-会社-加工（非常に複雑なので、今のところチーズ製造はブラックボックス化しよう）-流通-小売店-母-トーストに載ったチーズ-子供のお腹、というネットワークを想像してほしい。問題は—願わくばそれが明らかであってほしいが—、これらの諸連関が、無限の帰謬法を続けることができる（そしてそうする）ということである。あるいは、亀（古代インドの世界観では、半球の大地を支える象の下に亀がいると考えた）は、（亀の下には何かあるのかという問いに対し、亀の下には亀が、その亀の下には亀が...、と答える）おしゃべりが行くところどこまでも行く。問題は、ストラザーンが述べるように、「ネットワーク内のネットワーク」に関する「フラクタルなロジック」であり、ネットワークが意味を成すようにするためにどこで「ネットワークを切断」すべきか、ということである（1996: 523）。ストラザーンは、ネットワークは中断され、解釈されなければならないのは所有権を通じてであるということを我々に納得させる。私は、ストラザーンが同意しそうでない方法ではあるが、それに賛成する。

実践的な身体化された関与

また、私は、際限ない積極的な可能性をもったプロジェクトとして、ネットワークの追跡及びネットワークの遡行を理解している。私は、これが放棄されるとは考えていない。それは、プロセス指向で、ヒエラルキー（真にハイフンを付されたハイブリッド）の押しつけなしの諸連結を

示す (Cf. Bijker 1997: 262-267)。上記の場合では、人間・動物・テクノロジーの抽象的な概念化が、ある意味で、理論的には擬人化されて、人間中心的にならずに関係的にさせられることを可能にしている (Bennett 2010: 98-100)。つまり、そのようなアクターネットワークのアッサンブラージュにおいては、エージェンシーがあるのは明らかに人間だけではない。

しかし、これらの恩恵は、いくらかの犠牲を伴わずには享受できない。これらのアクターが一般的な意味で顕在化することを可能にする「自由な連関」と「非還元」はまた、まさにこれらのプロセスによって、生と身体化されたエージェンシーとを滅菌してしまう。それは、複数の環境世界を否定する。あるひとつのネットワークにおける、ある存在の全ての側面を説明することは不可能である。たとえば、ハイフンで連結することと「ブラックボックス化すること」とは、生きものたちが自分たちを他の生きものたちに連結させる彼ら自身の確かな諸様式をもっている、という事実を否定する (Imanishi 2002: 9-20)。それは、ネットワークを構築しようとする研究者以外のアクターたちの、環境に関する異なる認識を否定する。ユクスキュルのダニを思い起こす人もいるだろう。それによれば、ダニは、3つの知覚的指示プロセスと、栄養を与えるのに18年間も待つことのできる能力とから構成される環境世界にいる生きものである (2010: 44-52)！本稿の導入部で示した牛の霊のように、ダニをエージェントとして考えることは可能だろうか？そして、これを認めるとすれば (私はそうすることを提案する)、他の諸アクターとの関係でそのようなエージェンシーを同等として扱ったり、較量したり、あるいは正当にハイフン化することができるだろうか。アッサンブラージュとしてのダニ - 木 - 不本意な宿主は、興味深い探索装置である。しかし、そのようなハイフン化された諸連結においては、アクターたちは、非政治化されてしまう。これらは歴史をもたず、軌跡もなく、選択ももたず、価値体系または価値もなく、そして身体または環境さえもたないエージェントである。要するに、これらのエージェントは、おそらく彼らの特定の、そして言うまでもなく状況依存的に共有された環境世界を指し示すか、あるいは象徴的に表すべきネットワークには実践的に関与していない。それらは実際には、研究者によって実践的に配置された諸ポイントであり、そのネットワークが閉鎖することなく継続していかないう、選択された諸関係のネットワークにおける無時間的なマーカーである。

私は、ネットワークに関するこの見方を、家族写真か、またはよくてショート・ホーム・ビデオになぞらえよう。ANTの理論化は、観察者 (読者) に、共に生きる生を垣間見せる。そして、そのようなヴィジョン (ヴァージョン) において、非-人間たちは、存在感を示すかもしれない—おそらく、ペット犬、あるいは家族の新しい車は、写真のフレームのなかに写っているだろう—が、これは、写真を眺める時によく言われるように、その景色全体ではないのではないか？

身体化と環境世界：テイク2

ネットワークという概念を、人工授精に焦点を当てた民族誌的なパースペクティブから再検討することができる。牛の搾乳機器の事例で検討されなかったことは、北海道という環境で働くことであり、そこで働く人は、仕事中はほとんど、季節によって寒さに震えるか、または暑さで汗だくになる。人間にとって、この環境世界は不快である¹。しかしながら、そのような環境世界は、牛乳を傷ませることもあれば、保存させることもある。冷却されたグリースは装置の速度を遅めることがある一方で、熱くなったグリースは時折故障を引き起こす。雪は、かき集められる必要がある場合もあれば、そうでない場合もある。労働者たちはもちろん「単なる」労働者ではない。実に、彼らのバックグラウンドの多様性は私の日本人同僚たちをいつも驚かせる—中国人、台湾人、日本人、ブラジル人、インドネシア人、都市出身者に農村出身者、男性や女性、高校中退者や有名大学の卒業生、背の高い人や低い人、積極的な人や内気な人など多様である。酪農従事者という「型」は、こうした一般化を拒否する雑然としたコンテクストを越えては存在しない。経験が有する強い個別性を強調する一つの民族誌的なポイントは、搾乳機器の文脈での他者としての牛との接触が18秒足らずであるにもかかわらず、労働者たちが個別の牛たちを覚えており、この短い接触の瞬間に牛たちも個別の労働者たちを特定することができる、という事実である。これは、勤務時間の他の時点—たとえば、これら2400頭の牛たちの給餌や洗浄に費やされる時間—における、より個別化された相互作用に根ざしている。

人類学者ティム・インゴールドは、そのような歴史的で身体化された相互作用のメッシュワーク (*meshworks*) を、ネットワークに対置されるものとして理論化する (Ingold 2011: 63-94)。前述した家族写真のメタファーのように、あるネットワークにおいては、関係、時間そして相互作用は、環境世界—たとえば家族の環境世界—として観察者が捉えるものという背景の上に押しつけられた静止した時点である。しかしながら、環境世界を構成するのは諸関係であるのみならず、諸々の身体、歴史、欲望、価値観、そして認識、つまり個別の生きものやモノの、生きられたそして個別の経験である。インゴールドにとって、ここでの違いは、一方ではハイデガー、他方ではドゥルーズとガタリからの影響を受けたパースペクティブに由来するものである。つまり「このものの性 (*haecceity*)」の概念 (ある一点で交わるのではなく、永久に通り返るか、あるいは絡み合う複数の線) と共にある、「住まう」というパースペクティブ (世界の中にいることであり、世界の上にあることではない) である。これらの違いを詳細に記述するなかで、インゴールドは、各々

¹ 現象学的方法に沿って、これをさらに強調することができるだろう。異なる人びとは、個々の性質、身体化、ライフヒストリー等々に関連した、暑さと寒さに関する異なる耐性及び認識を持っている。それらはすべて、ネットワークのアプローチが有する抽象性をただ増強するのみである。

がその務めを果たし、各々が同じ目標に向かって働く蟻 (ant) の社会的ネットワークと、蜘蛛の巣の創造とを対比する。蜘蛛の巣は、その構築過程から獲物の捕獲という目的の明確で意図的な用途に至るまで、すべての繊維—蜘蛛の身体の巧みで感覚の鋭い拡張である一本一本の蜘蛛の糸によってその環境と一体であるかのように結びつけられるメッシュワークである (Ingold: 2011: 89-94)。このパースペクティブからは、そのネットワークを切断するものは、実際、いわゆる、所有だといえる。それは、ある個による、特定の歴史、身体、知覚、そして技能の所有であり、それらは個別の自己と他者 (生き物でも無生物でも) の網の目において (あるいはその一部として) 作用する。これは、ある共有された生きている生態環境という環境世界である。(ラトゥールの言う) ネットワークが、永久に創造的に作りだされるかもしれないし、抽象的に構築されるかもしれないのに対し、(インゴールドの言う) 蜘蛛の巣は、特定の個別的諸経験及び諸限界の世界の中に留まり続けるはずである。

ここでの要点は、概念としてのネットワークを退けることではない。人工授精は、ネットワーク及びメッシュワークが、相互的な (inter)- (実際には、入り込む enter)- 関係性およびエージェンシーを記述する際に、相互に有益なものとしてみられる事例である。その基礎となるネットワークは、まさに上述したようなものである—これは、人間-牛-テクノロジーの相互作用であり、より正確にはそれは、獣医-牛-精液のネットワークである。しかし、個別性は、このネットワークを切断するものであり、この環境世界と人間-牛-テクノロジーのメッシュワークに関するかなり生き生きした事例とにおいて満ち満ちている。

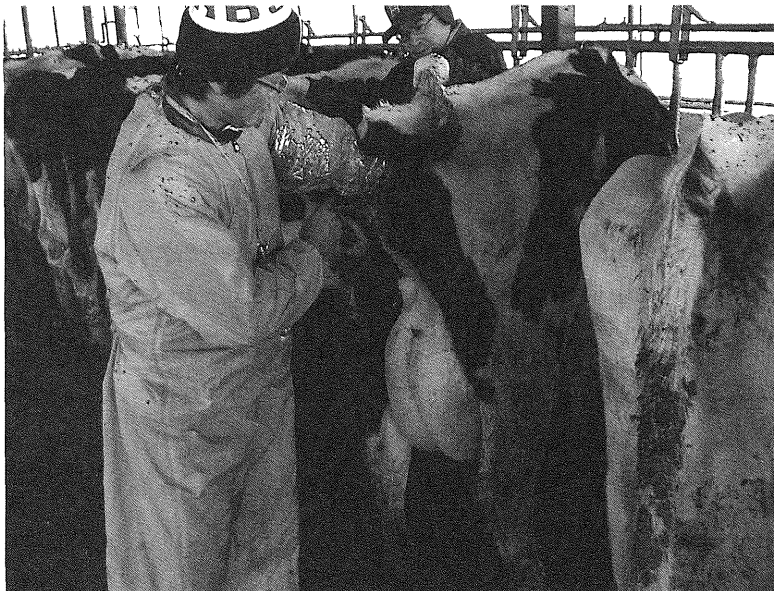


図3 人工授精の現場

人間の肛門に人間の腕を丸ごと挿入すること以上に、できるなら回避したい行為を想像することは難しい。しかしながら、牛の直腸内に人間の腕を挿入することは、日常的な人工授精の実践である。人工授精の現場を最初に目撃した多くの人びとを動揺させることは、それに対する、牛たちの、そして実に人間たちの基本的な無頓着さである。いかに我々はそのように異なった人間になりうるのか、と問わずにはいられない。若い雌牛たちは、最初は一様に物怖じするが（獣医学性も同様だと思われる）、3、4回目にはほとんど気にしないように見える。理解できないのは、腕を挿入する理由である。肛門の中に手を入れることで、膣を通して子宮へと機材を押し入れるのを導くというのは、ありふれたことかもしれない。しかし、すべての牛の肉、筋、組織の内的メッシュワークは異なる。獣医たちは、牛によって、精液の正確な配置は異なると告白している。獣医になるため、そして、生身の身体に見られる一貫性のなさに対応するためには、熟練した腕が求められるのだ。また、精液の選択は、無作為には行われぬ。ここでは受胎を成功させるために、多くの要素が、（何度も言われるように、）調和（mesh）する必要がある。つまり、所有者の意志、獣医の熟練した専門的技術、そしてもちろんすべてのプロセスの最も科学的なもの—つまり幸運—と並んで、発情期のタイミングと特定の牛のライフヒストリー—とがきわめて重要な役割を果たすのである。

おわりに：可能性と能力、ネットワークとメッシュワーク

ラトゥールはおそらくANTの最も偉大な師であり、多くの優れた師のたちのように、古典的なトリックスターである（Watts 2004）。彼は、新しいやり方で私たちの環境世界（enviro-world）を見てみるように促す。禅における悟りの瞬間のように、彼は、人類学者たちがエージェンシーとプロセスについての人間中心的な観点から自らを揺るがすこと、そして、我々のテクノクラートの世界的異種混交性に気づくことを望んでいる。そして私は、理論上は... 彼と一致している。または、クリフォード・ギアーツ（Clifford Geertz）がレヴィ＝ストロース（Lévi-Strauss）—もう一人のパラダイム創設者であるフランス人思想家—について述べるように、私は「評価するけれども、そして転向していない」ままである（Geertz 1988: 27）。このような具合に、私は以下で自分自身のたくらみを実行する。第一に、私はラトゥールを彼自身に差し向け、第二に、クローバーによる人類学の定義の再検討を通じて、本稿の導入部で述べたことに立ち戻ることにする。

私が別のところで日本の英語話者の人類学者たちの島国根性の特徴を説明する際（Hansen forthcoming）に用いた引用において、ラトゥールは、彼が社会科学の諸実践の「デフォルトの社会的なるもの」とみなすものを攻撃している（2005: 1-17, Hacking 2000 の同様の主張も参照のこと）。彼は「社会的なるもの（the social）」とは以下のようなものになったと考えている。

「(それは、)我々の精神的なソフトウェアの初期状態(である)。「社会的なもの」...は、以下のことを考慮に入れる。すなわち、非・社会的な諸活動が起きる所にも社会的な「文脈」は存在すること、それが現実のある特定の領域であること、それが、他の諸領域(心理学、法学、経済学など)が完全には扱うことのできない残された諸側面を説明する因果関係に関するある特定のタイプとして用いられうるということ、それが、社会学者か、あるいは社会-(x)―「x」はさまざまな学問領域のための代用語である—と呼ばれる専門家たちによって研究されること、通常のエージェントたちは常に社会的世界の「内部」にあるため、彼らは、この世界に関するよくても「情報提供者たち」になれるぐらいで、悪ければその存在に気づき得ないこと、である...この初期状態は、社会学者たちにとってのみならず、新聞、大学教育、政党政治、バーでの会話、ファッション誌などを通じて普通のアクターたちにとっても常識になっている...社会科学は、公益事業会社が電力や電話サービスを供給するように、社会に関する定義を効果的に普及させてきた。」

(2005: 3-4)

しかし、この引用でラトゥールが批判する社会的なものthe socialの過度の包括性(私にはそう見える)は、多くの場合において、ネットワークの「自由な連関」や「非還元性」と類似したものとして理解され得ないのだろうか? いかにか効果的にネットワークすべきか(ネットワーキングはよく動詞として用いられる)で結び付けるのかに関していくつかの道筋がある。つまり、社会的ネットワーク、ブロードバンド・ネットワーク、あるいはXか又はYに関するグローバルなネットワーク、のように。もちろんこれらはみな、対象を指し示すための有用な略号である。しかしながら、「社会的なもの」のように、それらはすべて、個別のパースペクティブ、動機、価値、人びと、音などがなければ、「曖昧な」ままである。要するに、個々の生物及びモノたち、そしてそれらの個別主義的で独特な相互作用に見出されるユニークな歴史的な融合の、ユニークな組み合わせのありようである。

最後の事例として、私は、人類学者/活動家であるディディエ・ファッサン(Dider Fassin)の成果を用いて、私の要点を補強しよう。彼の最近の研究は、メッシュワークがひょっとしたらより適切であるかもしれない場合に、議論を導く概念としてのネットワークに焦点を当てようとするのもたらず、非常に現実的なジレンマと私が考えるものについての民族誌的な重要性について述べるために使うことができる。ファッサンは、パリの警官たちと、労働者階級が住む郊外の住民たちの異なる環境世界について検討している(Fassin 2013)。

日常的な交通違反に関する情報ネットワークにおけるちょっとした誤った伝達のために、20名の警察官がある低所得の地域を襲撃した。その警官たちは、交通違反者に不意打ちを食らわせ

たかった。別の諜報に関するネットワークを経由して、警官たちは、彼を有名な麻薬密売人でもあると疑っていたことも、その理由である。したがって、その地域に踏み込む目的を公表することなく、警官たちは、何が起きているのか全く知らない若者たちを追い回した。そして、自分たちの子どもたちのために介入しようとした家族たちを殴打した。最終的に警官たちは、容疑者の姉／妹の腕を折った拳銃に彼を逮捕したばかりのところ、彼が犯人ではなかったことを知った。彼は目が不自由だったのである。ファッサンは、警官と低所得の住民（圧倒的にアフリカからの移民たちで占められる）の、個別に身体化され、歴史的に位置づけられた環境世界がいかに全く通約不可能であるかを説明していく。警察は、経験のいくつかのポイント—ここに麻薬密売人が、あそこに泥棒が—から、この地区を危険な場所だとするネットワーク的な視点として作り上げていた。住民たちははかしながら、彼らの日々のやりとりや住まうことを通して、地区をひとつのメッシュワークとして、つまり、長年に亘ってよくない要素として知られるものをわずかに含む、良き共同体として理解している。ファッサンは、その事件の真実は、これらのパースペクティブの間にあると考える。その出来事を理解することは、

「… 両方のパースペクティブを真剣に考慮に入れ、それらを共に理解し易くするような説明（でなければならぬ）。エスノグラフィーはここでは極めて重要であるが、すべてを行うことではできない。それは、歴史的及び社会科学的な知識によって支えられなければならない。」

(Fassin 2013: 376)

研究対象が、非-人間と人間の間、規範的な、物質的で情動的な諸境界であると想定されるものを日常的に超えるようなトピックに取り組むこと。ネットワークとエージェントの概念は相互作用を枠づける大いなる潜在的可能性をもっており、諸知見を伝えることがきわめて重要であることを明らかにしてきた。それにもかかわらず、ネットワークは、研究者としての私の身体化された諸経験を公正に扱うには問題をはらんだままである。これは特に、人類学的民族誌、つまり様々な生の観察にのみではなく、それらの生に長期的に参与することに依拠する研究様式に主に根ざした研究を遂行する者において当てはまることである。人類学的民族誌は、ここで私は、本稿の導入部で書いた、科学的な分野における人文学者としての自分自身の表現に立ち戻らなければならない。要するに、一つの方法としての参与観察は、実験室又は医療活動のように、そして他の社会科学の諸方法論の大部分とは対照的に、人類学的なエスノグラファーにとって「すること」を伴う、ということである。これは、クローバーの主張の根底にあるものであり、ひょっとしたら私自身を欺いてきたものなのかもしれない。世界に関与する人類学者としての私自身の環境世界は、最初認めたよりも、多分より文学的でより哲学的とは言えず、おそらくより経験的

で科学的なものだろう。

謝辞

私の研究プロジェクトのさまざまな面で助成をいただいた、ロンドン大学東洋アフリカ学院、国際交流基金、日本学術振興会、筑波大学に対して感謝申し上げる。本稿の原文（英語版）は、内山田康教授（筑波大学人文社会系）が主催した国際シンポジウム“*Technology Anthropology, Umwelt*”（2013年10月3日、於：筑波大学）にて発表する機会を得た。内山田教授や私の学生たちのおかげで、私の考えは絶え間ない挑戦を受け、変化を促されている。本稿（日本語版）は、木村周平助教（筑波大学人文社会系）及び菊池真理（筑波大学大学院人文社会科学研究所・博士課程）による意見や翻訳なしには不可能であっただろう。

References:

- Bennett, Jane. 2010. *Vibrant Matter: A Political Ecology of Things*. Durham: Duke University Press.
- Bijker, Wiebe. 1997. *Of Bicycles, Bakelites, and Bulbs: Towards a Theory of Sociotechnical Change*. Cambridge USA: The MIT Press.
- Callon, Michel. And Pierre Lascoumes and Yannick Barthe. 2011. *Acting in an Uncertain World: An Essay on Technical Democracy*. trans. Graham Burchell Cambridge USA: The MIT Press.
- Derrida, Jacques. 2008. *The Animal that Therefore I am*. New York ed. Marie-Louise Mallet and trans David Wills. New York: Fordham University Press.
- Fassin, Didier. 2013. “Scenes From Urban Life: A Modest Proposal for a Critical Perspective Approach.” *Social Anthropology* 21 (3): 371-377.
- Franklin, Sarah. 2007. *Dolly Mixtures: The Remaking of Genealogy*. Durham: Duke University Press.
- Geertz, Clifford. 1984. “Anti Anti-relativism” in *American Anthropologist* 86 (2): 263-278.
- 1988. *Works and Lives: The Anthropologist as Author*. Stanford. Stanford University Press.
- Imanishi, Kinji. 2002 [1941]. *A Japanese View of Nature “The World of Living Things by Kinji Imanishi”* trans. Pamela Asquith, Heita Kawakatsu, Shusuke Yagi and Hiroyuko Takasaki. London: Routledge.
- Hacking, Ian. 2000. *The Social Construction of What?* Cambridge: Harvard University Press.
- Hansen, Paul. 2010. “Milked for All They Are Worth: Chinese Workers, Hokkaido Dairies.” *Culture and Agriculture* Access via Google 2013/11/20 http://www.academia.edu/3725217/Milked_For_All_Theyre_Worth_Chinese_Workers_Hokkaido_Dairies
- 2013a. “Becoming Bovine: Mechanics and Metamorphosis in Hokkaido’s Animal-Human-Machine.” *Journal of Rural Studies* Access via Google 2013/11/20 http://www.academia.edu/3725254/Becoming_Bovine_Mechanics_and_metamorphosis_in_Hokkaidos_animal-human-machine

- 2013b. "Japan's Fuzzy New Families: Affect and Embodiment in Dog-Human Relationships" *Asian Anthropology* 12 (2):
- (In Press) "The Anthropology of Japan's Social Saga: The Manufacture of Consent Through Descent, Dissent, and the Decent" a chapter in Berghahn book
- Haraway, Donna. 2008. *When Species Meet*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Ingold, Tim. 2011. *Being Alive: Essays on Movement Knowledge and Description*. New York: Routledge.
- Kirksey, Eben and Stefan Helmreich 2010. "The Emergence of Multi Species Ethnography" in *Cultural Anthropology* 25 (4): 545-576.
- Kirby, David. 2010. *Animal Factory: The Looming Threat of Industrial Pig, Dairy, and Poultry Farms to Humans and the Environment*. New York: St. Martin's Griffin.
- Kohn, Eduardo. (2013). *How Forests Think: Toward an Anthropology Beyond the Human*. Berkeley: University of California Press.
- Latour, Bruno. 2005. *Reassembling the Social: An Introduction to Actor-Network-Theory*. Oxford: Oxford University Press.
- 2009. And Ulrich Beck "Episode Five, Risk: How to Think About Science" Canadian Broadcast Corporation *Ideas With Paul Kennedy* producer David Cayley accessed via Google 2013/11/20 <http://www.prx.org/pieces/40989-episode-5-ulrich-beck-and-bruno-latour>
- 2013. *An Inquiry Into Modes of Existence: An Anthropology of the Moderns* trans. Catherine Porter. Cambridge: Harvard University Press.
- Nussbaum, Martha. 2006. *Frontiers of Justice: Disability, Nationality, Species Membership*. Cambridge: Harvard University Press.
- Pollon, Michael. 2006. *The Omnivore Dilemma: A Natural History of Four Meals*. London: The Penguin Press.
- Rabinow, Paul. 2011. *The Accompaniment: Assembling The Contemporary*. Chicago: University of Chicago Press.
- Rapport, Nigel. 2003. *I am Dynamite: An Alternative Anthropology of Power*. London: Routledge
- 2013. *Anyone: The Cosmopolitan Subject of Anthropology*. New York: Berghahn Books
- Sismondo, Sergio. 2010. *An Introduction to Science and Technology Studies (2nd edition)*. Oxford: Wiley-Blackwell.
- Strathern, Marilyn. 1996. "Cutting the Network" *The Journal of the Royal Anthropological Institute*. 2 (3): 517-535.
- 2004. *Partial Connections*. London: Altamira Press
- Turner, Victor. 1969. *The Ritual Process: Structure and Anti-Structure*. New Jersey: Transaction

Publishers.

von Uexküll, Jakob. 2010 [1934]. *A Foray Into The Worlds of Animals and Humans: With a Theory of Meaning [1940]*. trans. Joseph O' Neil. Minneapolis: University of Minnesota Press.

Watts, Allan. 2004. "Out of Your Mind" *Sounds True Audio Books*. Accessed via Google September 30th 2013. <http://www.youtube.com/watch?v=97Z6EmNy4VY>

Wolfe. Cary. 2010. *What is Posthumanism?* Minneapolis: University of Minnesota Press.